実践のまとめ（第６学年　国語科）

長岡市立前川小学校
教諭　黒崎　幹

１　研究テーマ

言語活動を通して主体的に表現し、考えを深めるための指導の工夫

２　研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを、国語科の目標として定めている。また、言葉による見方・考え方とは、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」としており、言葉を通じた理解や表現、そこで用いられる言葉そのものについての学びを深めることの重要性が示されている。

これまでの授業を振り返ると、問いや学習課題が教師主導で設定され、児童が自らの疑問や関心を原動力として「言葉」について問うていくような主体的な学びにつながっていなかった。そこで、児童が主体的に問いをもち、様々な言語活動を通して自分の考えの深まりや広がりを自覚できるような授業を目指して実践を行いたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

①　思考の具体化

教材文の中にある言葉同士の関係や意味、働きなどをもとに考えやイメージをもち、それらを絵や図、言葉等で表現することで漠然とした思考を具体化する。その上で他者と対話することにより、自らの考えとのずれや共通点に気付き、考えをより深化できるようにする。また、自らの考えに自信をもって対話に臨むことができるようにする。

②　考える必要感のある問いの設定

教師から提示された問いや課題では、児童の中に解決への必要感が薄く、主体的な学習活動にはつながらないと考える。児童自身から生まれた疑問や抱いた感想から問いを設定したり、問いを誘発するような手立てを講じたりすることにより、児童が自ら言葉に着目して考えを練る姿につなげる。

③　協働学習を促す学習方法

児童一人一人が主体的に学習に取り組むために、ジグソー学習を取り入れる。自分の役割に責任をもち、共通の課題についてグループで対話を行うことで、協働的に考えを深めることができるようにする。

(3) 研究テーマに関わる評価

①　振り返りシートに、自らの考えの変容や新たな気付きを記述する児童が増える。

②　「自分の考えを伝えること」や「他者と対話すること」についてのアンケートで肯定的評価が増える。

３　単元と指導計画

(1) 単元名

作品の世界を捉え、自分の考えを書こう　「やまなし」（小学校国語６　光村図書）

(2) 単元の目標

①　比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。

②　人物像や物語の全体像を具体的に想像して表現の効果を考えたり、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめたりすることができる。

③　言葉がもつよさを認識するとともに、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・　比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。 ・　文章を音読したり朗読したりしている。	・　「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。 ・　「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。	・　進んで、物語の全体像を想像し、学習の見通しをもって考えたことを文章にまとめようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（全８時間、本時６／８時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 （1）	・単元のめあての設定 ・学習計画の設定	◎単元のめあてを設定し、学習計画を設定する。 ◎初発の感想を書く。	態度　単元のめあてや学習計画を理解し、見通しをもって「やまなし」を読もうとしている。【発言・記述】
2 （6）	・宮沢賢治の生き方や考え方について捉える。 ・「谷川の底から見える光景」に着目して読み比べる。 ・対比するための観点を決める。 ・「表現」に着目して読み比べる。（本時）	◎「イーハトーヴの夢」を読み、作者の生き方や考え方について捉える。 ◎「谷川の底から見える光景」を簡単な絵に表して比べる。 ◎「五月」と「十二月」の場面の様子を対比するための観点を話し合う。 ◎色彩表現や人物等の様子に着目して場面を読み比べる。 ◎「カワセミ」と「やまなし」の違いをもとにして	思・判・表　宮沢賢治の生き方や考え方、作品の特徴を捉えている。【記述】 知・技　語のリズムや表現上の特色に気付いている。【発言・記述】 思・判・表　物語世界を具体的に想像し、場面ごとの違いについて捉えている。【記述】

	・「カワセミ」と「やまなし」の違いから題名の意図を考える。	題名の意図に迫っていけるようにする。	思・判・表 場面を比べて読み、題名に込められた思いを考えている。【記述】
3 （1）	・作品の主題を捉える。	◎作者が作品に込めた思いについて考え、交流する。	態度 表現や人物等の様子をもとに、作品世界を捉えることに粘り強く取り組み、自分の考えを書こうとしている。【行動・記述】

4　単元と児童

(1) 単元について

これまで作品を読んで表現の特徴を考えたり、人物像や作品の全体像を捉えて自分の考えをまとめたりする学習を重ねてきている。本単元で扱う教材文「やまなし」は、「私」による一人称視点で書かれた外枠と、三人称の客観的な視点で書かれた「五月」「十二月」の２枚の幻灯という額縁構造になっており、谷川の底から見た水中の世界が、「五月」と「十二月」とを対比させながら、宮沢賢治独特の色彩豊かな表現で描かれている。それらの表現を味わうとともに、作者の生き方に触れることを通して作品の世界観を捉えるという学習に取り組むことができる。

(2) 児童の実態

課題に対して真剣に取り組む児童が多く、既習事項やこれまでの学習経験を生かして考えることができる。一方で、自分の考えに自信がもてず、全体の前で発言することを躊躇する様子が見られる。そのため、国語の「読むこと」の単元では、叙述に基づいた読みをペアやトリオで伝え合う経験を積ませてきたが、対話場面では他者の考えに耳を傾けながらも、省察的に自分の考えを深めたり広げたりする姿が少なかった。そこで、本単元では、思考を具体化することで考えを整理したり、同じ課題に対してグループで探究する活動を通して考えを深めたり広げたりしていく姿を目指す。

5　本時の展開（令和５年11月１日実施）

(1) ねらい

喩えや色彩表現などに着目して２つの場面を読み比べ、２つの場面の違いについて考えることができる。

(2) 展開の構想

① 物語中の色彩表現や登場人物の会話、場面の様子等に着目することで、２つの場面の違いを捉えることができるようにする。

② 場面の違いを考えるための観点別にグループを作り、それぞれの観点で気付いたり感じたりした場面の違いを元のグループで共有する。

③ それぞれの観点での違いをもとに、２つの場面のテーマについてグループで考えることを通して、作者の作品に込めた思いや「やまなし」を題名にした意図に近付けるようにする。

④ 協働学習を通して自らの考えの変容や新たな気付きを自覚することで、学びを深めたり今後の学習への意欲につなげたりできるようにする。

(3) 展開

時間 (分)	○学習活動	◎教師の働き掛け ・予想される児童の反応	□評価　○支援　◇留意点
導入 （５）	○　前時までの学習を振り返る。	◎　２つの場面を比較する観点を確認する。 かにの会話・水の様子・色・上から来たものの様子	○　「谷川の底から見える光景」の絵などを提示することで、違いへの関心が高まるようにする。
	「五月」と「十二月」の場面の違いは何だろうか。		
展開 (35)	○観点別のグループごとに、表現や様子に着目して「五月」と「十二月」の場面の違いを探す。 ＜エキスパート活動＞	◎前時に個人学習で見付けた表現や様子の違いを出し合い、２つの場面の対比構造に気付かせる。 ・「こわいよ」 ⇔「おいしそうだね」 ・ぎらぎら⇔きらきら	○２つの場面で描かれていることを対比してまとめられるように、Jamboardを配付する。 思・判・表　表現等に着目して、場面ごとの違いについて捉えている。【記述】
	○元のグループに戻り、それぞれの観点で見付けた違いを共有する。 ＜ジグソー活動＞	◎エキスパート活動で考えたことを共有し、共通点を見付けるよう働きかける。	○それぞれの Jamboard を見せながら考えを共有できるように助言する。
	○「五月」と「十二月」のテーマについて考える。	◎２つの場面の違いをもとに、それぞれの場面のテーマを端的に考えさせる。 ・暗い世界⇔明るい世界 ・恐怖⇔幸せ	◇テーマとしてまとめられないグループは、「○○な世界」という言葉で考えさせる。
終末 （５）	○本時の学習での学びを振り返りシートに記入する。	◎場面の違いを考えて感じたことや気付いたことを記述するよう働き掛ける。 ・いろいろな観点で比べてみて、２つの場面の違いに気付いた。	態度　活動を通して感じたことや気付いたことを今後の学習に生かそうとしている。

(4) 評価

・物語世界を具体的に想像し、場面ごとの違いについて捉えている。【思判表　記述】

・活動を通して感じたことや気付いたことを今後の学習に生かそうとしている。

【態度　記述】

６　実践を振り返って

(1) 授業の実際（指導の実際）

①　教材文を読み、作品のもつ世界を感じる（第１～２次）

まず、教材文を読んで作者である宮沢賢治の独特な表現を味わうとともに、疑問に思ったことや不思議に感じたことなどについて初発の感想を書いた。多くの児童は作品の展開について不思議に感じたり、数多く使われているオノマトペを楽しんだりしながら読んでいる様子が見られた。また、資料「イーハトーヴの夢」を読んで年表にまとめ、作者の生き方や考え方にふれた。以下、児童の感想からの一部抜粋である。

- 不思議な現象がたくさん起きてて、世界観がすごいと思った。
- 「かぷかぷ」や「つぶつぶ」という音の表し方が面白かった。
- クラムボンやイサドとは何か不思議に思った。
- カニのお父さんが「魚は食べられた」と言わずに、「魚は怖い所へ行った」と言っていたのが面白かった。
- 題名の「やまなし」が最後の場面あたりで出てきたので不思議だった。

②　教材文を読んでイメージした様子を絵に表して比べる（第２次）

様々な表現に目を向け、「五月」と「十二月」の場面の様子を絵で表した。全文プリントを用い、挿絵に左右されずに作品中の「ことば」に着目して場面の様子を想像させたことで、かにの親子の様子や光の差し込み方、水の流れや揺らめきなどを、想像を膨らませながら描く姿が見られた。（図１・２）描いた２つの絵を並べて比べると、２つの場面には様々な違いがあることを捉えることができた。

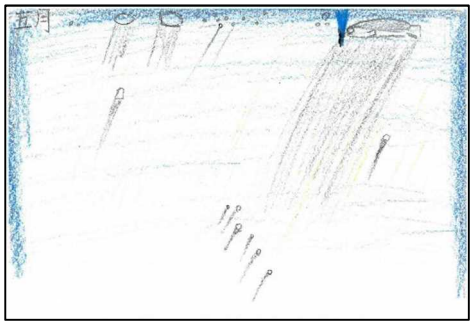

図１

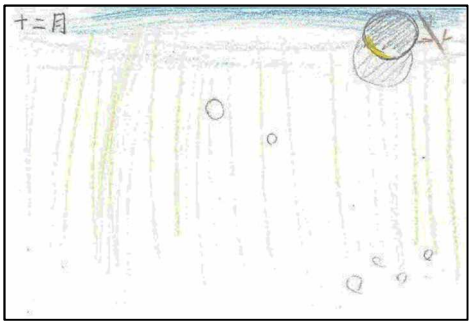

図２

③　ジグソー学習を通して、２つの場面の違いを読む（第２次）

２つの場面にどのような違いがあるのかを比較するために、「かにの様子」「色」「水や光の様子」「上から来たもの」の４つの観点を定めた。グループ内で観点を分担し、同じ観点同士で集まって違いを探した。「かにの様子」については、五月の場面で「こわい」「殺された」と怖がっている様子が十二月では見られなくなっているこ

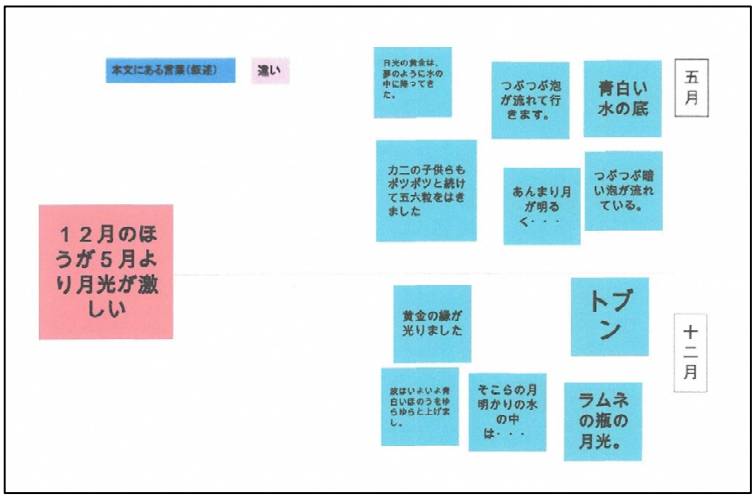

図３

とを挙げた。「色」については、２つの場面で出てくる色の明るさを比べ、十二月に明るい色が多いことを見付けた。「水や光の様子」については、水や泡の様子や川底に注ぐ光の様子についての叙述を探し、十二月は夜にも関わらず五月よりも明るく描かれているという考えをもった。「上から来たもの」については、かわせみとやまなしの様子を並べ、それらとの関わりによるかにの心情の違いに気付いた。その後、違いを記入した Jamboard を示しながら元のグループで交流し、様々な観点での違いを共有できるようにした。（図３）そして、全ての観点で見付けた違いを概観した上で、２つの場面のテーマを考える活動を行った。

④　題名の意図から作品に込められた思いについて考える（第３次）

読み取った場面の違いと資料「イーハトーヴの夢」で得た知識とを結び付け、作品に込められた思いを考えた。「やまなしが宮沢賢治と似ている」と考えたり、「やまなしのように誰かに喜びを与えるような人が増えてほしい」という作者の願いを感じたりして、作者の生き方と作品とを関わらせながら考えをもっていた。

(3) 研究テーマに関わって

①　実践前の調査では、「自分の考えを伝えることができるか」について否定的回答をする児童が２人いたが、実践後の調査では全児童が肯定的回答を示した。また、「そう思う」と回答した割合にも増加が見られた。（図４）作品から受け取った漠然としたイメージを絵に表して具体化したことで、自分の考えをより明確にもつことができた。また、同じ課題をもった仲間とグループを組んで協働的に学習したことで、自信をもって考えや気付きを伝えることができた。

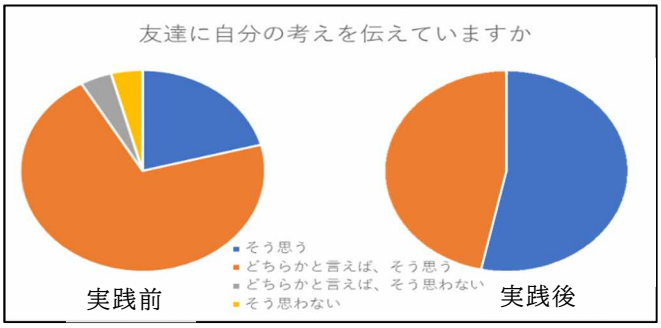

図４

②　授業後の振り返りでは、エキスパート活動で見付けた観点ごとの違いや、ジグソー活動を通して気付いた２つの場面の違いについての記述が見られた。また、考えを伝え合うことで得た新たな気付きや協働することのよさについての記述も見られたことから、指導の工夫を行った本単元の学習を通して、自身の考えの深まりや広がりを感じられたのではないかと考える。

(3) 今後の課題

同調査では、「自分の考えを伝えることが好きか」について実践前後共に４割程度の児童が否定的回答を示しており、表現することへの苦手意識が根強くあることが窺われた。課題解決に向けて協働したり、互いの考えを伝え合い深めたりする経験を積み重ね、そのよさをさらに自覚させていく必要があると考える。そのためにも、児童がより主体的に考え、自己選択し、課題解決に向けて自ら動き出すような手立ての工夫を続けていく。

＜参考文献＞

「小学校学習指導要領解説　国語編」文部科学省（2018.2）
「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」文部科学省（2020.2）